

二輪車は、四輪車に見せる・見られる運転が大事



二輪車は楽しく便利な乗り物だけど、ブレーキやアクセル操作を誤ると転倒したり、車体が小さいために四輪車から見落とされたり、といった点に注意して運転しなければいけない面もあるんだよ。

まとめクイズ

Yes、Noのどちらかを選んでください

Q1. 道路では、二輪車は四輪車より車体が小さいので、四輪車のドライバーは常に二輪車に気を配ってくれる。

Yes No

Q2. 二輪車は車体が小さいので、実際の速度より遅く感じられる。

Yes No

Q3. 二輪車は風を感じる、人車一体感があるなど、運転する楽しみが大きいですが、転倒すると大ケガになる可能性が高い。

Yes No

Q4. 二輪車事故の相手でもっとも多いのは、四輪車で約半数を占める。

Yes No



→解答は次ページに!



Q1. No

二輪車は車体が小さく、運転者の身体も外に出ているので、四輪車と衝突すると、二輪ライダーの被害が大きくなりがちです。

二輪車に気を配ってくれる四輪ドライバーはたしかにいますが、車体が大きいことを理由に、道を譲るのは二輪車のほうだと思ふ人たちがいます。

四輪車の死角に入らない、四輪が自分に気づいているかどうか、また右左折待ちの四輪車の動きに注意を払うなど、二輪のライダーは、自分を守る運転を心がけてください。



四輪車の左横を走るときは、四輪車の死角に注意しましょう

Q2. Yes

二輪車が直進して交差点に入ろうとしているとき、対向の四輪車が右折して事故になることがあります。原因のひとつは、二輪車の速度を低く見積もったためといわれます。詳しくは次ページの「四輪車の特性を知ろう」を読んでください。

Q3. Yes

四輪車は車体が大きいため、いろいろな安全装備をつけることができます。一方、二輪車の安全装備は、ヘルメット、手足をむきだしにしない衣服や靴、手袋などですが、いったん事故にあうと四輪車よりも大きな被害を受けてしまいます。ライダーは、交通状況を正確に判断する力や、ブレーキングやコーナリングの操作力を上げる努力が求められます。

Q4. No

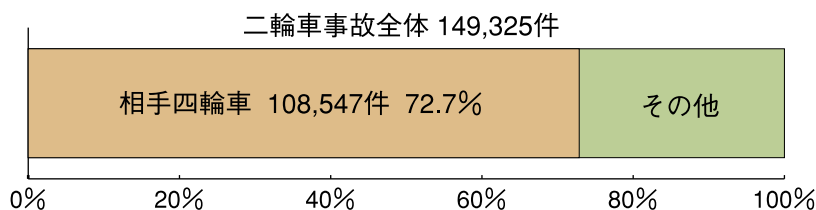
二輪車事故の相手の約4分の3が四輪車です。(コラム1:グラフ1)

**コラム
1**

四輪車の動きに注意しよう

二輪車の事故の約4分の3は、四輪車との事故です。二輪車と四輪車は、大きさも乗り物特性も違うため、お互いの行動特性が理解されずに起きる事故もあります。四輪車との事故を防ぐためには、四輪車の特性、二輪車の特性を考えることが重要です。

グラフ1 二輪車事故の相手に占める四輪車の比率



(財)交通事故総合分析センター 平成20年

●四輪車の特性を知ろう

四輪車の二輪車に対する錯覚、軽視などで起きる事故。

「右直事故」はなぜ起きる

四輪ドライバーの二輪車に対する速度や走行位置の「過小評価」や「見落とし」「軽視」が働いて起きやすい事故の代表例が、「右直事故」（交差点を直進する二輪車と、対向車線から右折する四輪車が衝突する事故）です。

右直事故は、見通しがよく、四輪車と二輪車がお互いに見えていても起きることがあります。二輪ライダーは、「当然四輪車は自分を見ているはず」「青信号で直進する二輪車に優先権がある」と考えがちです。しかし、四輪ドライバーが、

- ・ 二輪車の速度を低く見積もる
- ・ 走行位置を実際より遠くに感じることで、二輪が交差点に入る前に右折できると、判断する
- ・ 自分が右折を始めたら二輪は待ってくれるだろう、と思いつく可能性もあります。

ドライバーの立場で考えてみよう

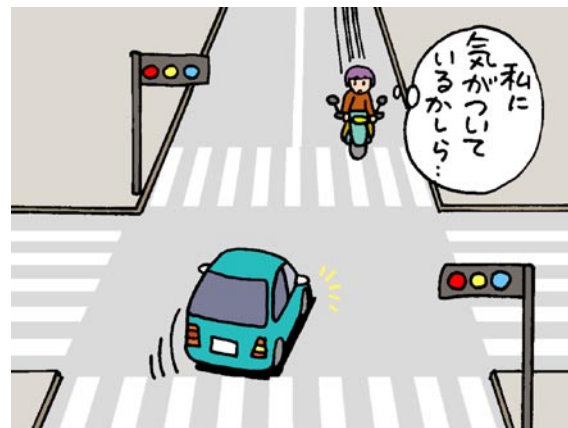
右直事故を防ぐには、四輪車の動きをよく観察しながら、交差点に入らないといけません。

「四輪車に乗るようになって初めて、二輪車が見えに

くい存在であることがわかった」

「二輪車しか経験のないときは、四輪車は当然自分のことを見ていてくれると思って、四輪車の動きに注意を払っていなかった」との感想は、二輪免許を取ったあと、普通免許を取った人の話です。

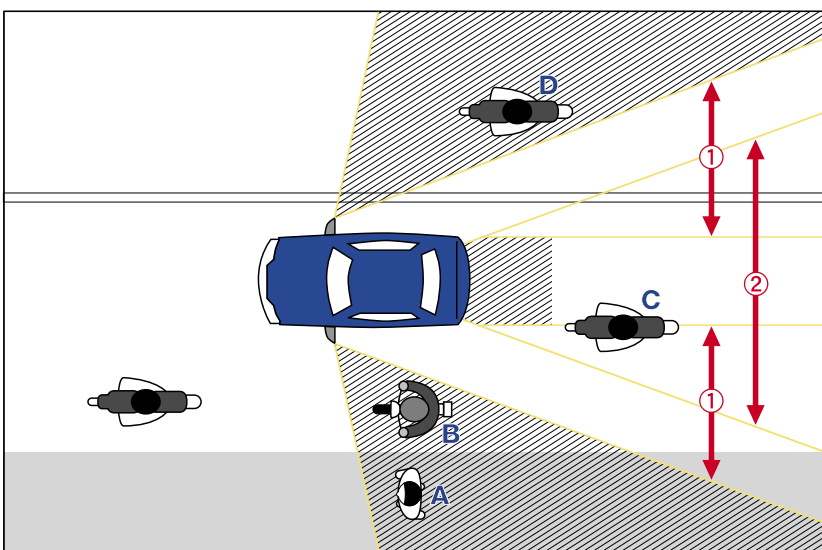
事故を防ぐためには、「この場面で、自分は相手にどう見えているのか」と相手の立場にたって考えることが大切です。



交差点を通過するとき、右折しようとする四輪車の動きをマークしよう

コラム 2

四輪車の死角を知っておこう



①はドアミラーに、②はルームミラーに写る範囲。斜線の部分はミラーに写らない。

図中のA,B,Dは、四輪ドライバーが首を回せば確認できますが、それを怠るドライバーもいます。死角に入らないような走行位置を取るよう工夫をしましょう。死角に入っていると、ドライバーは気づかずに、車線変更したり、左折を始め、二輪と接触します。



・家族の車の運転席に座ってみて、運転席から周囲がどのように見えるのか、実際に確かめてみましょう。(コラム2の死角図参照)



・自分が二輪車の免許を取ったらどんなところに行きたいか、考えてみましょう。



・自宅の車や路線バスなどに乗っているとき、助手席や後部座席から、道路を走る二輪車の動きを観察してみましょう。





見ていることを確認してもらう、 見られていることを確認する。

岡野道治 日本大学理工学部教授

MESSAGE

反射神経に自信がある若い人たちは、「見られる」ということをあまり意識しないのではないのでしょうか。たとえば自転車でも、中学生くらいになると、夜間ライトをつけて走っている人は少ない。これは、自分は何があっても必ずよけられる、と思い込んでいるせいです。交通状況にいる人すべてが自分と同じ反射神経をもっている人ばかりではない、ということに気づいてほしいですね。自分が見ることはもちろん大切ですが、相手が自分を見ているかどうか、ということもとても重要なのです。

オーストラリアの交通安全教育テキストに、「自転車のときは手信号で自分の行きたい方向を知らせなさい。そしてそれをドライバーが見た、ということを確認しなさい」と書いてありました。見られていることを確認する、見ていることを確認してもらう、というのは難しいですが、たとえば相手がちょっと車の速度を落とした、ということで「見た」だろうな、と確認できるはず。「見る・見られる」ことの意味を今一步踏み込んで考えていただきたいですね。